

令和元年青年部・改革 座談会

Guest：青年部会長 金田琳氏、青年部直前会長 近藤大樹氏

Interviewer：(一社)愛知県産業廃棄物協会副会長・広報編集委員長 中野 兼司氏

中野：今回の座談会は、青年部直前会長の近藤大樹氏（中部保全（株））と、今期会長に就任された金田琳氏（サンコーリサイクル（株））にご出席していただき、今後の青年部の在り方について率直な意見交換をお願いしたいと思っております。

では、はじめに金田新会長に現在の心境をお話しいただけますか。

金田：私は青年部に入部して約9年。正直なところ最初の頃は目的が理解できず、青年部の活動を重要視していませんでしたが、これまでの活動から多くの事を学びました。ここ最近、20代の方が入会したことをきっかけに、何故親世代の方が後継者である若者を入れたのか考えました。それは自分もそうであったように、社会経験が浅い未完成の部分、特に社会人としてのマナーを組織の中で育てて欲しいと願ったのではないかと思います。今後、青年部のメンバーは理事会の役職を担っていき、協会活動及び業界をリードするためにも、全員で青年部の存在意義を見直す機会を提案するべく、今期新会長になりました。

中野：では、お話しの中にある、社会的なマナーを組織の中で育てる、について教えてください。

金田：現在、全員が二世（血縁関係者も含む。）会員という訳ではなく、会社の役職を担う立場の会社員もいます。私の経験からですが、若い年齢層の会員は事業活動に真摯に取り組むことで、青年部の中で揉まれ自然に社会性を育む、という事につながるのではないかと思います。

中野：今、親族関係と会社員の構成比は、どうですか。

近藤：半々ぐらいか、6（親族）：4（会社員）ぐらいの割合です。近年会社員の比率が上がってきています。

中野：今の話の中で思ったのですが、親族関係の

方達は、事業に出席しやすい環境にあると思いますが、そうじゃない立場の方（会社員）は、やはり大義名分というものが**必要だ**と思います。今期事業計画の中にもある**出席率の向上**は、そこに結びついてくるのではないかと思います。その辺りについてはいかがですか。

金田：はい、今期の総会では、出席率に対して着目しました。しかし、これは今に始まった問題ではなく、これまでは、“積極的な声掛け”で出席を募ってきました。そこで、事業活動の目的をより明確にし、趣旨をご理解いただき、事業への「全員参加」をテーマに掲げました。具体的には、従来の委員会（教育情報委員会、視察研修委員会）に、新たに「広報委員会」を創設しました。役割としては、これまでの青年部の活動について知らない方も多いと感じましたので、今後の活動を外部に発信する事を目的としました。このようにPRを行う事は、長い歴史を持つ青年部の活動を理解していただけると思いますが、それにより共感した同志とつながり、開催する事業にも関心をもっていただけ、更には新規会員への誘致ともなり得ます。広報のツールはまだ具体化されていませんが、案としては、チラシの配布、SNSを活用、ホームページ（以下、「HP」という。）の立ち上げ、HPであれば維持管理やデータの更新はどうするのか等々、予算もありますので媒体の選択は今後委員会で検討する予定です。

もう一つは、これまで各委員会は年間2事業でしたが、年間1事業としました。これまでの形態にこだわることなく、量より質の向上を求めました。具体的には2回分の事業予算を1回分に割り当て、事業のクオリティを上げることにより、今までなかなか参加されなかった会員に想いが届くのではないかと**いう結論に達**しました。それにより得られる効果が今期事業計画で述べた、各委員会事業の「全員

参加」につなげていきたいと思っています。

中野：わかりました。では次に直前会長の近藤さんにお聞きしたいのですが、長年青年部に携わってこられ、今まで積み上げてきた内容や方向性で何かお伝えしておきたいことがあればお願いします。

近藤：これまで年度の事業が2事業であったという点について、過去にも各委員会の年度の頻度が1事業の年もありました。その時、会員から「年に1事業にすると顔を合わす機会が年3回、各委員は4月の総会後から委員会をしますが、方向性が定まってくると出席率が下がってきます。委員会の出席率が下がってくると顔を合わす機会も少なくなるので、やはり部内を活性化するためにも2事業がいいのではないか。」と多数声が上がリ、2事業になったという経緯があります。これについては、1がいいのか、2がいいのか、と言うと、なかなか難しいところがありますが、今年は1事業でやっていくという新会長の想いがあるようなので、それに向けて各委員会が実りのある事業を企画していく事を望みます。

私は、青年部の横のつながりを大切にしてきました。親会は縦のつながりですが、私達は何でも話せ、困った仕事の時は誰々に聞けば教えてくれるよ、誰々に頼めば対応してくれるよ、と気軽に助け合える横のつながりを今後も大事にしてほしいと思っています。

中野：そうですね。では、これまで会長をされて良かったことを教えていただけますか。

近藤：昨年のことですが、研修視察で北海道の野村興産（株）イトムカ鉱業所に行きました。水銀廃棄物の法改正があり、一番旬な話題であったことから会員の関心が非常に高く、廃乾電池・廃蛍光灯のリサイクル／日本唯一の水銀リサイクル処理企業における施設見学は私達に大きな影響を与えました。



(一社) 愛知県産業廃棄物協会青年部直前会長・近藤 大樹氏

その際、北海道での震災（北海道胆振東部地震）の地を視察させていただき、災害廃棄物の対策について一刻も早い取り組みが現場では求められている事に、全員が真剣に考えさせられました。その折、メンバーから北海道へ視察に行けて有意義であった、との声が聞けた時、会長としての責務が果たせ安堵しました。

中野：参加された方の評判が良かったのですね。

近藤：そうですね。イトムカに行きたいと思っても、北海道は遠く一人で行く時間の取れない会員にとっては、視察研修先としてはベストな選択であったと、今振り返ってみるとそう思います。

中野：前会長の近藤さんのお話しから、金田会長はこの部分は守って引き継ぎたい、ということなどありますか。

金田：基本的にはこれまでの先輩方の考え方を引き継いでいくつもりです。しかし自分なりの考えもあり、今年度の役員を一新し、入部数年の方や初めて役員を担う若い世代を登用いたしました。それはその方達に、これまでの既成概念が無いという利点から、新しい事ができるのではないかな、という期待が持てたからです。

中野：それがあって、ガラッと変えたという部分があるのですね。

金田：そうです。

中野：青年部の新しい役員の方も、ちょっとドキドキというか、不安や期待が入り混じったのが、今の状況ですね。また、2年後の青年部のイメージはおありですか。例えば今の1事業にしたということは、質を高めるためと仰いましたが、質を高めるとは、どの部分をどう高めたいのか、金田会長の中にありますか。

金田：現在理事会から毎年100万円という助成金を頂いて、運営資金として活用しています。しかしその運用について、年齢差から生じる理事会の方々のビジョンとの距離感を若干感じる事があります。現時点では両者が納得できるような具体的案が決まっておりませんが、青年部の事業を理事会の皆様提案していきたい、ということをして是非この2年間でやりたいと思っています。

中野：それは何かを提案するという事ですか。

金田：例として、過去の事業内容に「ホワイト企業」

に関して研修会を開催した際、「ホワイト企業大賞」について関心を持ちました。今の働き方改革にもつながる要素がありますので、今後検討してみたい一つです。

中野：ありがとうございました。今回、総会の中で出席率の向上について提案されていましたが、これまでの出席率について何かありますか。

金田：総会の配布資料に記載した事業計画にも、これまでの出席率に触れましたが、事業に参加する会員はほぼ毎回同じ方が出席しています。なぜ出席されないのか、欠席が続く理由が必ずあると思いました。一回目は参加されたと思うのですが、その一回でご自身の方向性と合わないと判断されたのか、一度お会いして話を伺いたいと思っています。これまでの声掛けだけではなく、今期は本腰を入れて副会長、各委員長の協力を得て、この1年のうちに長く参加されない会員を訪問させていただく予定です。

中野：よくこういう会で私も耳にするのが、出席したいが欠席している間が長いと出づらい、なんらかのきっかけがないと出にくい、誰かから声を掛けられて一緒に出てくれるなら出席します等々、参加しにくくなった会員も中にはいるかもしれませんね。いろいろな事情や社内の環境もあると思います。会員にお声掛けをするというのは大変でしょうが、とても良い取り組みだと思います。



(一社)愛知県産業廃棄物協会青年部会長・金田 琳氏

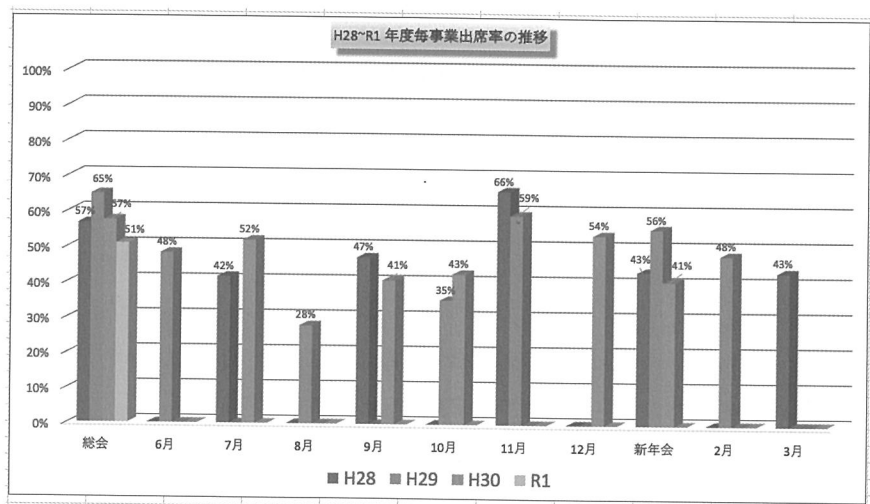
では、先ほどの理事会と青年部では、良い悪いは別にして考え方や価値観が多少違うというのはあると思います。しかし、世界は今、性別や価値観から宗教観等、非常に多様化されています。SDGsにしても世界各国で多様化したものをどのようにまとめていくか、これからの我々の課題だと思うのです。そこで、キーワードとして「合意形成」があります。多種多様な考え方が違う人たちが集まり進めて行く上で、例えば反対派と賛成派の人がいます。そして、その人達をまとめて運営していかなくてはならないのです。このような事から、先ほどの近藤直前会長が、私はこう思う、ああ思うというのは、とても大切だと思います。最終的に合意形成するための手段というテーマで、何かお考えがあればお聞かせください。

近藤：例えば少数派の意見と多数派の意見で決まるのであれば、これまでは多数派の意見で決める事が多かったです。かといって少数派の人達を切り捨てるというのは難しいと思いますので、そこを上手く調整し、なるべく多数派の意見、賛成派の意見に近づいてもらえるようにしていたのではないかと思います。何度か調整を繰り返すうちに、最終的に合意形成をしていったのではないかと思います。

金田：先月の役員会が正にそのような感じでした。その時は広報委員会でHPを作ろうという話になり、HPの必要性について意見が分かれました。今やICTが欠かせない時代となり、仕事をする

H28~R1 年度毎事業出席率の推移

	会員数	年度	総会	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	新年会	2月	3月
2016/30回	53	H28	30		22		25		35		23		23
2017/31回	54	H29	35	26		15		19	32		30	26	
2018/32回	54	H30	31		28		22	23		29	22		
2019/33回	59	R1	30										



上でも会社情報の発信として必要なツールですが、会員の中には無くてもいいのではないかと、という意見がありました。HPをアップする効果としては、業界の最新情報、事業の案内、タイムリーな出来事など会員にとっては多くのメリットが提供できますので、次回の広報委員会にて理解を得られるよう話をさせていただくつもりです。実は、全体を取りまとめる上で、私の中では必ずしも多数の意見で判断を下す、ということが正しいとは思っていません。会長としては、引っ張っていく私と今回の役員が同じ方向を見て、正しいと判断したものに関して、仮に、私達が少数であったとしても、その意見を選ぶ可能性はあります。但し、少数派の意見が通った場合は、多数派の方達に時間を掛けて説明をする、合意形成に近づけるという努力は必要であると考えています。

中野：それぞれのお考えは、運営する上で必ず出てくる問題だと思います。一つの方法として、反対派と賛成派がいるとし

ます。しかし、そこに焦点を合わせてしまうと一向に平行線です。そこで、考えたのが、10年後の未来、そこに焦点を合わせてみる。例えば「この街の10年後はどういう街になってほしいですか」、と問うてみる。反対派は子供や孫たちが過ごしやすい街とか、賛成派も同じような事を言います。実はそこで合意形成がまずできます。ならば、反対・賛成の問題について、今は横に置いておいて、10年後の部分で議論しようという討論会を行ったことがあります。私が強くお伝えしたいことは、これだけの価値観が多様化の中で、このようなケースはこれからのリーダーや、責任者には常に問題提起として出てきます。だからこそ、全体の調整をバランスよく図り、求められている以上の結果を導き出すスキル（人間力）が、これからのリーダーにますます望まれているのではな

いかと思います。大きな期待を込めて、この先進めていていただきたいと思っています。

今後についてですが、理事会や青年部出身である永井良一会長もご提案されていますが、若手の行政担当者と青年部との「意見交換会」の実施に向けて、ご意見をお聞かせください。

金田：行政との「意見交換会」は、実施する方向で考えています。しかし、先ほどもお話しした通り、新役員としての意識を高める期間も必要であると考えますので、今期は難しいと思いますが、来年度には、まず愛知県と行いたいと思っています。

中野：最後になりますが、後輩に対してエールと

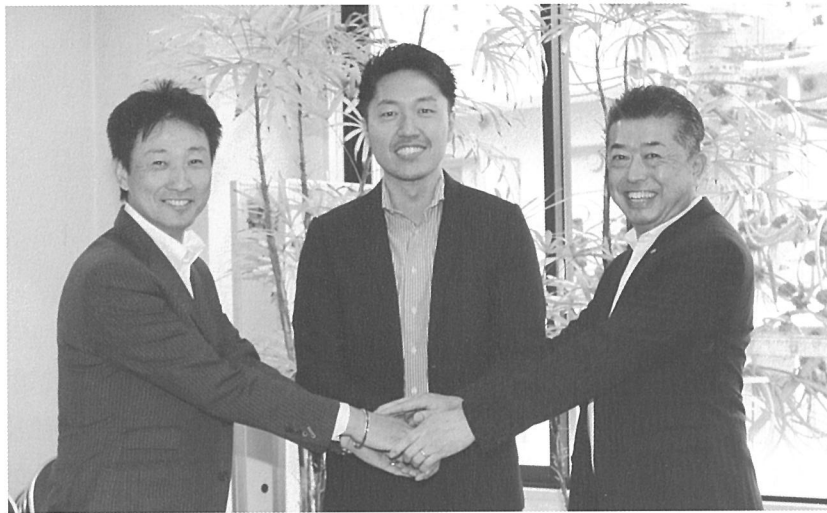
いいますか、次の青年部の皆さんに対してメッセージをお願いします。

近藤：会員が出たいと思えるような事業運営をしていって欲しいと思いますし、会員が出やすい事業の開催というものが必要ではないかなと思います。

今後この青年部をより盛り上げていき、今の副会

長から、委員長の中から次期の会長を決めていかないといけないと思いますので、是非頑張ってください。

金田：自分自身の方向性は定まっているので、近藤直前会長をはじめその他の役員の方、先輩の方々のご協力を仰ぎ、活気のある青年部を運営して参ります。よろしくお申し上げます。



左から（一社）愛知県産業廃棄物協会青年部直前会長 近藤大樹氏、同協会青年部新会長 金田琳氏 同協会副会長・広報編集委員長 中野兼司氏

★青年部今期の目標★

出席率：全事業60%以上の参加者
(目標は事業計画にある全員参加)

会員数：75名に増員（令和2年度）
(現在59名の会員数に対し約30%増)